



新春巻頭言

今こそ友愛精神

理事長 鳩山由紀夫

「友愛」を手にとってくださいましたみなさん、明けておめでとうございます。

年のせいなのでしょうが、一年が経つのが毎年早くなってきたような感じがしています。

コロナの感染が世界に広まって、あっという間に三年が経ちました。その間は、友愛小論文コンテストや友愛国際写真コンクールなど、中国の学生さんたちのお付き合いもオンラインになったり中断したりせざるを得ない状況が続きました。

またミャンマー青年の農業研修事業はコロナに加えて国軍がクーデターで政権を握ったために、青年たちが来日すること自体が叶わなくなり、支援の在り方そのものを考え直さざるを得なくなりました。

そんな中、オーストリアのOEJAB（オーストリア勤労青年連盟）との交流事業はようやく再開されて、五名の派遣員をオーストリアに送ることができました。この内二人は、既に社会人として活躍しています。

またOEJABから、管理職であり、今後の友愛との交流を担当している職員二名を受け入れ、広島・京都などを訪問、友愛理念と日本文化の理解を中心に活動していただきました。

このように悲喜こもごもの一年でしたが、今年は祖父一郎が「相互尊重・相互理解・相互扶助」の友愛理念をとくに若者たちに広めたいと、友愛青年同志会を創設して70周年に当たります。この記念すべき年に「友愛」の活動も初心に戻らないよう努めます。

初心に戻るとなれば、国際交流などとても大事な事業であると思いますが、日本の若者たちに友愛の

理念を広めることを、何よりも優先しなければならぬ事業と位置付けるべきでしょう。

「友愛」の活動がややもすればマンネリ化して、事業をそつなくこなすことが自己目的化していたとすれば、結果として友愛活動の経験者たちの自己満足の道具となり、これから生きる若者たちへの友愛理念の普及がなおざりにされていたのではないかと反省します。

そう考えますと、昨年一年は希望の光が差し込んできた一年であったとも思います。

まず働き盛りの若い理事たちが、以前に増して積極的に「友愛」の事業に自分の主張を展開して、既存の事業に新しい芽を生み出し、育もうとしてくれるようになりました。

例えばミャンマー青年の農業研修事業は確かにコロナと国軍の政権支配により、受け入れは中断せざるを得ませんでした。が、だから事業の中止ではなく、ミャンマーの農業は土づくりから始めるべきだとそのノウハウを学び、さらに東京農工大学を訪れ、専門の先生方のご協力を得て、将来的にミャンマーを訪問し農業指導をする可能性まで出てきました。

中国の日本語を学ぶ大学生に対する友愛小論文コンテストは、コロナで対面での交流が暫く途絶えていますが、オンラインならば複数の大学との同時開催も可能ですし、友愛をより早く広めるためには複数の大学で小論文コンテストをやるべきとなり、実施対象校が二校に増えました。

そしてコロナが収まった場合でも、友愛の理念を理解している若い理事たちが積極的に中国の大学を訪問して学生たちと若者同士での交流をしてくれる雰囲気が出てきているように思え、とても望ましいと感じています。

OEJABとの交流事業は三年ぶりに再開することができましたが、実際にはオーストリアへの学生の派遣事業はコロナ下でも募集を続けており、二年分の選抜された優秀な学生の一部が先般オーストリアを訪問したのです。今年度中に残りのメンバーと今年選考された派遣員も、派遣させたいと考えています。

派遣の際には時間の許す限り、若い理事にも参加をしてもらおうことを考えています。

そして何より嬉しいことは、オーストリア・中国に派遣された、あるいは派遣予定の学生を中心に結成された「友愛ユニオン」が活発に行動してくれていることです。

彼らは難民救済などのOEJABの事業をつぶさに見てきてくれています。昨年の派遣組はウクライナからの難民たちとも交流してきました。彼らは戦争がもたらす悲惨な現実を目の当たりにしてきたのです。大変に貴重な経験だと思います。

彼らの中から、日本として何ができるか、難民の受け入れに消極的な日本であり続けて良いのか、少なくとも「友愛」の活動として、難民問題をどう扱っていくべきか、などの議論が生まれてきています。そこから「友愛」の新たな事業の可能性を検討していきたいと思っています。

友愛ユニオンの仲間たちは友愛の理念の重要性を実体験してくれていますので、友愛の伝道師となってくれる可能性を秘めているのです。また、オーストリアの派遣事業に応募してくれた学生たちは、選に漏れた人たちはもほみな優秀で、紙一重と言っても良いくらいでしたので、彼らも友愛の理念を学んでくれたら、将来、様々な「友愛」の活動に参加してくれるのではないかと期待をしています。

このように「友愛」の事業に何らかの形で関心を持つてくれた若者たちを広く集めて、デジタル社会が進行して希薄となりがちな人間関係の中で、友愛の理念の大切さを共有出来たら素晴らしいと考えています。

昨年の二月、ロシアがウクライナに侵攻しました。今でも戦闘は続いています。戦争はどちらかが一〇〇%正しく、どちらかが一〇〇%間違っているという単純なものではありません。その両者を理解して戦争を終結させる努力が求められています。そこに必要とされるのが友愛精神ではないでしょうか。今、世界の国の指導者に求められているのはまさに友愛精神なのです。

相互に尊重し、相互に理解し、相互に助け合う友愛精神が世界を埋め尽くせば、戦争など起こり得ません。理想論と言われても、友愛の理念を広めることが今こそ世界に求められていると信じて、「友愛」を発展させていきたいと願っています。



題字：鳩山威一郎

機関紙「友愛」

発行所

公益財団法人 友愛

〒112-0002
東京都文京区小石川
1-10-13 小石川文ビル2階

TEL: 03-5684-3188

FAX: 03-5684-3186

E-Mail: you-i@yuai-love.com

http://yuai-love.com

編集人：羽中田元美

隔月1回 10日発行

会費(4月～3月)

個人／3,000円以上

法人／10,000円以上

友愛国際交流事業

担当理事が語る現状と展望・更なる発展を目指して！

友愛小論文コンテスト

―若者の言葉から学ぶ―

攪上哲夫

「二〇二一年度友愛小論文コンテスト」上位三名の作品が友愛五七八号に掲載されている。北京語言大学より選拔され送られてきた十五作品を再読した。

コンテストのテーマである「私にとって友愛とは」から、中国の若者が「友愛」をどのように捉えているのか、中国の大学生の言葉から「友愛」の意味、イメージを知ることが、これからの「友愛活動」の方向を探るヒントとなると考える。

小論文コンテストの目的を、「友愛理念の啓発は次世代を担う若者にこそ必要」、「世界の平和に資する若者の育成は必要欠くべからざる事柄」、「日本語を理解できる人材の育成は、友愛理念の啓発に重要な要素」と事業概要で位置付けている。この事業は、「中国国内にある諸大学の協力を得て、友愛についてのレクチャー（講演・ビデオ等）を行い参加学生より小論文を日本語で募り、優秀作品を表彰する」と実施方法が示されている。

二〇二一年度小論文コンテストに参加した大学生は北京語言大学で日本語を専攻している学生である。コ

ロナ禍のためオンラインでの講演会となったが約一〇〇名の学生が会場に集い、Webで聴講している数百名の学生との合同で講演会が開催された。

はじめに茂木理事から「友愛について」の講演、次に鳩山理事長と茂木理事との対談「友愛と脳科学」、友愛理事五名による「私にとっての友愛とは」とスピーチが続き、最後に参加した学生からの質問に鳩山理事長が答える質疑応答で講演会は終了した。この講演会に参加した学生が「私にとって友愛とは」のテーマで小論文を執筆し、中国側審査員の審査結果を受けて、日本側審査委員より優秀作品が選ばれたのである。

「友愛について」の講演、次に鳩山理事長と茂木理事との対談「友愛と脳科学」、友愛理事五名による「私にとっての友愛とは」とスピーチが続き、最後に参加した学生からの質問に鳩山理事長が答える質疑応答で講演会は終了した。この講演会に参加した学生が「私にとって友愛とは」のテーマで小論文を執筆し、中国側審査員の審査結果を受けて、日本側審査委員より優秀作品が選ばれたのである。

この事業は、コンテストという趣旨から優秀を競うことは避けられないが、多くの中国の若者が「友愛」を自身の問題として考えるきっかけになることを期待している。したがって、日本語能力による作品の優劣は必然的にあるものの、自分の言葉で「友愛」を表現するところに意味があると主張したい。以下、一五作品から「友愛」をどのよう



を持つこそ平和的な国関係、友愛的な社会環境が築くことができるのだ。」

⑪「私にとって、友愛は虹のような形をもって、人と人、国と国との間にまたがっている架橋の役割を果たしています。」

⑫「今の世界はまだ友愛の世界とは言えませんが、理想を唱えた人がいるからこそ徐々に現実が変わっていくのではないのでしょうか。私はずっとそう信じています。」

⑬「友愛とは、『人種も身分も問わず、善や美を突き詰めようとし、親切で愛のある行い、心より世界中の人々とながっている』というものでなくてそれはなんだろうか。」

⑭「鳩山先生の講演を契機に、友愛精神を改めて学び、これからの世代を担う一若者として歩んで行こうと思う。」

⑮「講演会で茂木健一郎先生のおっしゃったように『友愛』は、『あなたと私』が一緒にいること、そして相手に対して敬意を持つことと表しているとともに、世界の調和、平和、共存の理想を考えると参考にしなければならぬ精神だ。」

最後に、今年度の友愛講演会は三月に、北京外語大学、北京科技大学二校の学生に対して講演会を開催し、同様の作品コンクールを実施する。日中・中日友好のすそ野を広げるべく準備をしている。

＊作品集郵送は事務局まで

写真上1／賞状を授与する攪上理事（右）写真上2友愛講演会の様子

ミャンマー農業発展支援
農業指導者育成事業の現状と今後の展望

井田安信

二〇一四年から実施しているこのプロジェクトについては、二〇一九年度まで毎年ミャンマーより農業指導者となるべく選抜された研修生を招聘し、カビック（鹿児島県アジア・太平洋農村研修センター）の力を借りて研修を実施してまいりました。

ところで、二〇二一年度からは下記の方向性で活動を続けています。

①肥料を施すことの必要性を、農業従事者が強く認識するよう啓発していく。

②肥料は「安全・安価」な「堆肥」が好ましいことを知らせる（購入の必要がない）。

ところが二〇一九年十二月からの新型コロナウイルスの影響で二〇二〇年度の研修生の受入ができなくなりました。

③身近にある材料（鶏糞・糠・もみ殻・魚の廃棄物・糞・その他）を使って「堆肥」をつくる。

④堆肥を使うことは、「有機野菜」として商品価値を高めることができる。

①④をまとめて、解りやすい（ミャンマー語表記・イラストなど多用して）リーフレットを作成し、ミャンマーの農村地帯で配布することを模索しています。

私たちは、これまでの七年間の農業指導者支援育成事業を通じて、経済活動につながるような（質・量）農作物を生産するには、土壌改良（施肥）の必要性があることを認識しました。

この度、南整理事のご協力をいただき南整理事の母校である東京農工大学の教授の皆さんにご相談させていただく機会を得ました。その結果、多くの教授方から貴重なご意見と現在でもミャンマーに渡航されて農業支援をされているキーマンのご紹介をいただき、この事業の今後の展望が見えてきましたので報告させていただきます。

ミャンマーの現在の状況として、北部は戦乱が続いており日本人が渡航するには適していないこと、中部や南部であれば比較的世情

も安定していることが判りました。またミャンマーの土質は、大きく北部・中部・南部で特徴があり、その土地に適した肥料が有効であることを教えていただきました。

まだ計画の段階ですが、東京農工大学藤井名誉教授の協力を得て、ミャンマーのイエジン農業大学の先生を日本に招聘し、日本でミャンマーの農業に必要な肥料や緑肥の勉強をしていただき、ミャンマーに帰ってそれを実践していただくことを検討しています。イエジン大学と協力して、ミャンマー各地域の雑駁な土壌の性質（PH値・成分構成など）の調査や、「緑肥農法」の実施の検討（豆は「ムクナ豆」を検討）を進めてまいります。

農業の実践の場として、現地に「友愛ファーム」を設けて、現地で手に入る肥料（緑肥）を使った畑の土地づくりと作物の収穫を目指していきます。現地とのやり取りはスマホを使いオンラインでのやり取りがきますし、日本からも収穫時などには現地に赴き、現



友愛ユニオン懇親会にて 井田理事（右端）

